

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

第二部

『化身土巻』に学ぶ（9）

前回は Zoom のリモートで「諸経の起説」を、お話をさせていただきました。その「五種の起説」のなかで「変化説」の重要性を述べてきました。そういう中で、仏教は「思想の呪縛からの解放」である、という事を申し上げてまいりました。そしてその「思想の呪縛」とは「自己確信」という事と押さえ、それが私たちの「信心獲得」とどう違うのか、という問題提起をしてまいりました。

もう一度、復習しますと、三願転入の話が終わりまして、「信に知りぬ」から新たに展開されていくわけですが、ここから正像末法の三時教史観によって述べられて行っていることに注目しておかなければなりません。この三時教に基づいて「五種の起説」がのべられ、また、この「四依」も釈迦の入滅時に、その後を何を抛り所にしていっていいのか、という時点で三時教の一端を述べていることになるわけですね。

そして、その後の御自釈の「しかれば末代の道俗」と末法時期の人々、つまり親鸞聖人時代の人々に呼びかけているわけです。続いて、次の御自釈では「今の時の道俗」と呼びかけ、その時の年号を明確に出されております。そして『末法燈明記』が述べられていきます。

このように、「信に知りぬ」以降一貫して三時教史観に則って述べられていることは明白であります。これは、これから述べていきますが、次の「課題48 四依を考える」では、ちょっと触れておわってまいりましたので、今回はこの「課題48の四依を考える」ということを引き続いて述べていきたいと思っております。

課題48 「四依」を考える（2）

この「四依」について、もう一度、前回のノートをここに取り上げておきましょう。

先の「説人」の所で、「しかれば四種の所説は信用に足らず」と言い、大事なものは「大聖の自説なり」と言われております。しかしここで、たとえ大聖の自説であっても、正しく読み取らなければならない、というわけですね。それは、「四依」四つの依りどころ、によって法を修しなさい、というわけです。（P358-7）

それでは、「四依」とは何か。釈迦が涅槃の時、「自灯明法灯明」が説かれたとするのが有名ですが、これは自分の行の在り方（四念処）のことで、ここでいう「四依」とは異なります。ここでは『智度論』を用いて述べられていきますが、この「四依」が説かれた現場を見てみますと、「自灯明法灯明」は阿難の疑問について説かれた言葉ですね。この「四依」については（p357-下4）「もろもろの比丘に語りたまわく」という違いがあることも注意しておく必要があるかもしれません。

それで文頭に、「今日より」という言葉から始まります。ということは「私（釈尊）がいる間は私を依り処にしても、これから（今日から）は私を依り処してはならない」というのが第一の意味ではないのか。これは「自灯明法灯明」と同じ意味でしょうけど、自分自ら法を学ぶにしても、その学び方を次の三つで示しているようです。

第二の「義に依る」とは法に対する見方読み方なのでしょう。

第三の「智に依る」とは世間に対する態度の在り方でしょう。私たちの文明などを見てみると、楽を求

め樂を実現してきた文明に他ならないでしょ。私たちは善悪を無視しているわけではないのですが、善と悪は何か、よくわからないのが現実です。たいていは人に樂を与えるのが善、苦を与えるのが悪、という所で判断しているのではないのでしょうか。そして地球温暖化になったわけです。私達、善悪を正しく量り分別することがいかに難しいか、今もって平然に侵略戦争をしているわけです。

第四は、私はこれが一番大切なことだと感じているのですが、私達の生きる指針だと思います。いわゆる「帰依三宝」ですね。ところが、釈迦牟尼仏が入滅されてしまったら三帰依が成り立たなくなってしまうわけです。末法とは無仏の世ですから。それは「見仏の善根がないからだ」というわけですね。裏を返せば、「仏はまします」ということになります。皆さんはこの第四をどう読まれますか？

ここからは、私の私見なんですけど、「私たちの中に大勢の智人がいます。その中に仏がまします。また、たくさんの諸経の書があります。その中に仏法が説かれている書があります。また私たちの中に、比丘僧がいらっしゃいます。しかし私達には、それが見抜くことができないだけである。」という事ではないでしょうか。

と申し上げておりました。ここで一つ疑問になるのですが、一方で末法・無仏の世と言いながら、もう一方で「佛まします」というわけです。これをどう理解するか。皆さんはここをどう読み解くのでしょうか。

実は、ここの文章を、親鸞聖人は、縮めて引用されているんです。原文では「・・・比丘僧第一なり」と「無仏世の衆生を・・・」の間には長い文章があるのですが、それが省略されています。しかも普通は「乃至」などで繋げているわけですが、ここではなさらなかったわけですね。ここに聖人の意思が感じられるわけです。

『大正大蔵経』第 25 卷 p 1 2 5 を見てみますと、(外されている部分ですが) 布施・持戒等の了義経と未了義が述べられています。それから、一時一世界に二仏を俱出しないことを述べ、「復次に汝が言うが如し。佛言く、一事として是れ佛世尊に値い難し。又、九十一劫。三劫佛有り余劫皆空にして佛無し、甚だ憐愍愍すべしと言えり」という文章があって、「無仏世の・・・」という文が続いていきます。

この外された部分は「依了義経」の延長線上にあるわけですので、無関係ではないのですけれども、ここでは無仏であり無仏でない、という両方を言っているわけです。そして「見仏の善根」が出てくるわけです。

私たちはこの事から、何を読み取るべきでしょうか。

そういたしますと、前に遡って p 357 - 6 「浄土真宗は、在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、齊しく悲引したもうをや」に行き着くのではないかと考えます。つまり、言うならば「今、この末法の世において浄土真宗だけが佛に値う事ができるのだ。」という思いが溢れ出ている気がいたします。

ここに、真宗の「釈迦・弥陀の二尊教」という事の原理が示されていると思うのです。釈迦の入滅からの展開として阿弥陀佛に巡り合うという事なのでしょう。この「阿弥陀に会う」という事はどういうことかと言えば、教・行・信・証という事なのでしょう。

それは、『証卷』 p 280 - 下 3 「しかれば弥陀如来は如より来生して、報・応・化種々の身を示し現したもうなり」と言い切られておりますね。「身を示現する」のです。

皆さん、この「身を示現する」という事をどう見ますか。文字から見ると、具体性を示す表現ですね。それをここの「依了義経」の所でいえば「一切智人います、仏第一なり」という文言に言いきっていると思います。この世にたくさんの智人がおります、と言って、その中で仏が第一である、と言っています。一切智人の中に、仏がいるかいないかわからないのではない。仏が必ずいる、ということでしょう。

もし、いるかいないかわからないならば、「いる場合は仏第一、いない場合は菩薩第一」などとなるでしょう。(屁理屈か?)

ここで、もう一つ考えなければならないことは、「報・応・化種々の身」という事です。つまりいろんな姿として示現されるという事ですね。そうした場合、平安時代に起こってくる「本地垂迹」とどう違うのか、

という事を吟味しておかなければなりません。本地である阿弥陀仏がいろんな神々等に垂迹してくる、というのが「本地垂迹」ですね。当時の人たちは、この「報・応・化種々の身」という事を、本地垂迹と重ねて理解していたのではないかと想像したりしております。でも、問題は、今われわれの所で同じことを言ってしまうのかどうかです。そうでなければ、我々は、この「報・応・化種々の身」を明確な理解をしておかなければならない、という事になりますね。

これは、『証卷』に行った時の宿題にしておきましょう。というよりも、私達の生活上の宗教的感覚の問題なのであります。

課題49 親鸞の末法史観

先に申しましたが、三願転入の話が終わって、聖道・浄土の比較を取り上げて、末法に視点を当てようとされています。それは、今の時間を末法の時間に照らし合わせている文章まで載せています。(p360) 親鸞はなぜ、そこまでして末法にこだわっているのか、ですね。この年号(元仁元年)を見ますと、親鸞聖人は51歳です。

今年、親鸞聖人ご生誕850年、立教開宗800年になってます。そういたしますと立教開宗の年は50歳のときになるわけです。(親鸞においてはあくまで法然上人を「真宗興隆の太祖」としているのではないかとと思うのですが、一体だれが立教開宗の年号を決めたのでしょうか?)

そうなりますと、この51歳の時の出来事が、気になってきますね。それで、少し歴史を探ってみたいと思います。

(1) 念仏弾圧の系譜(年号と親鸞の年齢)

元久二年(33歳) 興福寺衆徒、専修念仏の不法9か条あげて禁圧を奏上。

承元元年(35;) 専修念仏禁止の院宣くだる。門弟処罰。

建暦元年(39;) 法然・親鸞流罪許される。

承久元年(46;) 専修念仏禁止。

元仁元年(51;) 5月「延暦寺大衆解」をもって専修念仏停止を請う。

6月後堀河天皇、専修念仏停廃の宣旨を下す。

7月隆寛・聖覚・空阿が流罪。

(2) 「延暦寺大衆解」(六項目)

- 1 不可建宗
- 2 不当神明向背
- 3 不快倭漢ノ例
- 4 不至広行流布ノ時節
- 5 背經逆師
- 6 停止一向専修

と、まあざっと述べましたが、この「元仁元年」というのは親鸞が『化身土巻』で述べている年号と同一ですね。そしてそこで述べている「延暦寺大衆解」の中の4番目。ここでは末法到来説の否定が中心になっているようです。[名畑崇著『教行信証成立の背景』(2011年安居本講)参照]

そういたしますと、親鸞聖人がここで何を問題にしたかったかが、伺えるかと思えます。やはり念仏弾圧に対する反論でしょう。しかもそれが単なる反発ではなく、論理的な反論なんです。ここでは末法の年号の相違に対して、きちんと説明していきます。

ここに(p358)「・・・を教誡す」とありますが、『末巻』にも「・・・を教誡せば」と出てくるこれらは、まさに念仏弾圧に対する論理的な反論ではないでしょうか。

そのスタートが「四依」でしょう。宗派を問わず仏教徒ならば「四依を知りて法を修」しなければならぬ

い、と。延暦寺の僧侶達は「四依」に立って論じているのか、と叫んでいるように、私は感じています。

ここで「聖道・浄土の真仮を顕開」とありますね。そして「邪偽・異執の外教」と述べられています。「外教」というのは仏教以外の宗教という事でしょう。つまり「四依」に反する了解の考え方はもはや仏教ではない、という事なのでしょう。それを「教誡す」る。この言葉になんか親鸞聖人の怒りと共に悲しみを感じてなりません。かつて自分が学び自分を育ててくれた延暦寺を批判しなければならない深い悲しみを感じてしまいます。

(かつて若い時、宗門の内局と口論になったことがありましたが、私を育ててくれた宗門が理に反した答弁に腹が立つのと同時に悲しかったことを思い出します。)

そして、その「教誡」の初めが、「正・像・末法の旨際を開示」という事ですね。これは明らかに先の「延暦寺大衆解」の四番を受けて述べられています。それについて、『安楽集』を引用して述べられます。

その初めに「外の凡夫」と出てきます。親鸞聖人はこの「外」に注目されて「外教」と言われているのではないのでしょうか。私たちは「外道」というと「仏教以外」と思い込みますが、仏教の中に「外」がある、という事で「外教」と言っているように思います。

次に、仏涅槃後の 500 年刻みで説明され、そして「延暦寺大衆解」が書かれた年号と同じ元仁元年の年号を述べておられるわけです。これはなぜか。親鸞聖人が『教行信証』を書かれていてちょうどここまでかかれて元仁元年だった、などという事は考えにくいでしょう。『教行信証』を書き始めてここまでこの一年だった、というのも無理がある。この大作は何年もかかっているはずですが、それなのに完成間際になぜ年号を記載されたのか、完成された最後に年号を記載されてもおかしくはないはずですが。

そう考えると、この年号記載は「延暦寺大衆解」に対する批判文としてここから述べようとしていると考えられるべきでしょう。そしてその後に延暦寺の開祖、最澄の『末法燈明記』を引用しているのも、内容が正像末が述べているだけではなく、「あなた方の開祖最澄が、こう言っているんですよ」というイヤミにも似た反論を述べておられる、と思えば私は痛快にさえ感じてしまいます。

課題 50 「僧尼の威儀を毀る」を述べた意図を考える

上記の「四依」が述べられて次に「爾れば、末代の道俗」と呼びかけられています。つまり末法に立脚して述べられていることが分かります。つまりすでに末法時であることを自覚されている、という事です。そしてここから正像末史観が述べられていることは課題 49 で述べてきました。

そして次の御自釈に「爾れば、穢悪・濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る。今の時の道俗、己が分を思量せよ」とあります。この「爾れば」というのは（アキラカ・必然の詞、答の詞）という義だそうですので、「言い切る」という事でしょう。それだけ大事な事、という事です。その大事な事という内容は「末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る」という部分でしょう。もっとわかりやすく言えば、「末法の時だという事を知らないから、僧尼の姿・振る舞い・態度を非難するんだ。」という事でしょう。

とするならば、親鸞聖人にとって、専修念仏の僧であるという宣言と同時に仲間全体が仏教徒であることの宣言でもある、と思うんです。これをあえて言うならば、末法時における専修念仏仏教の独立宣言とでも言うべきではないでしょうか。

(大谷派では親鸞聖人ご生誕から 50 年後に立教開宗の年月を規定していますが、何を根拠に言われているか、私はわかりませんが、このへんから何う事ができるのではないかと思います。)

また、「四依」の「比丘僧第一」に通じるようにも思います。つまり、佛も法も僧もあるんだ、という事でしょう。これをいうならば、浄土真宗こそ末法時において三宝に出会う教えである、という事を示しているのでしょう。

もう一つ、「僧尼」という表現ですが、親鸞聖人はあまり使われてはいません。この表現はどういう時に使われている言語でしょうか。別の言葉でいえば「比丘比丘尼」という事です。男女の僧という事ですね。

それを「僧尼」と使われるのはどこででしょうか。

勝浦令子氏の『古代・中世の女性と仏教』を見ると、女性が僧侶になるのはかなり古く、6世紀後半には尼寺や法師寺などが建立されている、と述べられている。(『日本書紀』による)そして、その僧と尼の秩序をを保つため「僧尼令(そうにりょう)」が発令されていきます。ここに公的言語として使われているわけです。

そういたしますと、親鸞聖人は公的言語を用いて述べているわけです。つまりその意図は何か、という事になってきます。その言葉を発しているのは「穢悪・濁世の群生」に向かってですね。ではこの「穢悪・濁世の群生」とは誰の事でしょうか。考えられることは、当時の社会の人々全体でしょう。言い換えれば社会に対していつているわけでしょう。そして「今の時の道俗」と言い直して「己が分を思量せよ」と啓発していると読み取ることができるのではないのでしょうか。

それでは、ここの「分」とは何でしょうか。「分」の意味はいろいろありますが、ここでは「本分」という事でしょう。「今、私達、僧も俗もみんなで自分のなすべき本分を考えなさい」と諭しているのではないかと思うわけです。

今回はこれぐらいにしておきましょう。